

職業訓練を通じたソーシャル・スキルの習得 Who Can Acquire Social Skills through Vocational Training?

松本 暢平, 新目 真紀, 松本 和重,
小柳 雅幸, 平田 彰

Yohei Matsumoto, Maki Arame, Kazushige Matsumoto,
Masayuki Koyanagi and Akira Hirata

This article discusses who can acquire social skills through vocational training by analyzing the data from the quantitative survey towards enrollees in vocational training for the graduates from high schools. The analyses examined two hypotheses; namely, (1) the more enthusiastically and autonomously enrollees participate in vocational training, the more they can heighten but also generic skills, and (2) the more enthusiastically and autonomously enrollees spend themselves time for extracurricular work, the more they can heighten generic skills. With χ^2 test and t test, both hypotheses were supported to some extent. Vocational training has mainly focused on the professional skills, however, this article indicates it helps the enrollees acquire not only professional skills but also generic skills.

Keywords: Vocational Training, Generic Skills, Enthusiasm and autonomy over Learning, Extracurricular Work

1. はじめに—課題の設定

本稿は、主として高等学校卒業者を対象とする職業訓練（以下、学卒者訓練）を実施する職業能力開発大学校（以下、能開大）の受講者に対して行ったアンケート調査のデータを用いて、能開大での生活が、専門的な知識・技能、職業生活や日常生活を円滑に営むうえで求められる汎用的な技能（以下、汎用的技能）の獲得に与える影響を検討することを目的とする。

近年、大学（学士課程）教育において、教育プログラムや教授学習方法と学生の専門的な知識・能力や汎用的技能の獲得との関連に関する研究が、大学教育の質保証に関する文脈のなかで盛んに行われている。たとえば、学問的知識と汎用的技能の獲得に、教育プログラムと学生の関与の双方が重要であることを指摘した小方直幸（2008）^[1]、大学生の学習時間から、大学ごとに学習行動が異なること、獲得される能力の違いに大学の授業特性が影響することを指摘した両角亜希子（2009）^[2]、大学教育を通じて獲得される能力が、学生のタイプによって異なることを指摘した溝上慎一（2009）^[3]、長時間授業に出席するだけでは必ずしも能力獲得にはつながらず、授業関連学習が能力獲得に関連することを指摘した谷村英洋（2009）^[4]、授業をはじめとする大学での学びを通じて汎用的技能が獲得されることを指摘した山田剛史ら（2010）^[5]、学習動機や意欲が能力獲得に強い影響力を

有し、授業形態を工夫することで学生に意欲を持たせることが学習成果の向上に寄与することを指摘した金子元久（2012）^[6]などをあげられる。また、大学でどのような能力を身につけた人が社会生活で組織人として活躍するかについて言及した中原淳ら^[7]（2014）のように、学校から仕事への移行に関する研究も盛んに行われている。

一方、法令上の規定こそ学校教育とは異なるものの、「ものづくり」分野の専門的な技能の獲得を目指す教育活動としての職業訓練においては、それが実験実習やグループワーク等の協働作業を多く含むにもかかわらず、専門的な知識・技能の獲得には焦点が当てられてきたものの、受講者の汎用的技能の獲得についてはほとんど言及されず、十分に研究が蓄積されているとはいいがたい。

そこで、本稿では、学卒者訓練を事例として、以下の2つの仮説、すなわち（1）学卒者訓練に積極的かつ自律的に臨むことは、専門的な知識・技能ばかりでなく汎用的技能の獲得と関連がある、（2）学卒者訓練ばかりでなく、日常生活における諸活動にも積極的かつ自律的にとりくむことは、汎用的技能の獲得と関連がある、を設定する。本稿では、両仮説を検証するため、能開大への入学動機、学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度と汎用的技能との関連を検討する。さらに、典型的な1週間の過ごし方から、正課内外での時間の使い方と汎用的技能の獲得状況との関連を検討する。

2. 使用するデータ

本稿では、2016年7月にA県内の能開大で電気分野の学卒者訓練を受講する受講生（専門課程1～2年、応用課程3～4年の合計4学年）に対して実施したアンケート調査で得られた83名分のデータ（回答率100.0%（欠席者を除く））を分析する。アンケートでは、汎用的技能として、ソーシャル・スキル18項目、キャリア・アダプタビリティ17項目、リーダーシップ4項目、サーバント・リーダーシップ10項目を尋ねた（注1）。加えて、受講

者の動機や行動として、能開大への入学動機12項目、学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度14項目、典型的な1週間の過ごし方11項目を尋ねた（注2）。

前節で設定した仮説を検討するため、本稿では、汎用的技能のひとつとみなし得るソーシャル・スキル^[8]（表1）（注3）に着目し、学卒者訓練の出席時間、能開大への入学動機、学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度、典型的な1週間の過ごし方とそれとの関連を、クロス集計と χ^2 検定、t検定を用いて検討する（本調査を通じて尋ねたソーシャル・スキル以外の項目は、稿末の表8～13を参照されたい）。

表1 ソーシャル・スキル（18項目）

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
9. 課題をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか。
12. 課題上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
16. 何か失敗したとき、すぐに謝まることができますか。
17. まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。
18. 課題の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

3. 結果と考察

3.1. 学卒者訓練の出席時間

教育機関での能力獲得を検討する際、正課学習にどの程度取り組んでいるかは、まずもって検討されることであると言えよう。本調査でも、1週間あたりの学卒者訓練への出席時間について尋ねたが、当初の予測通り、受講者は他の諸活動より長い時間を学卒者訓練に割いていることがわかった。71.1%が1週間あたり21時間以上、7.2%が1週間あたり16～20時間学卒者訓練に出席していると回答していた。出席時間がそれ以下の受講者が約2割いたものの、大半の受講者が1週間のかんりの時間を学卒者訓練に充てており、受講時間数に差がつかない

ことがわかった。能開大の場合、どのような動機や考え方、態度で学卒者訓練に臨むかと、あるいは、学卒者訓練以外でどのように行動しているかといった面を特に考慮して分析する必要があると考えられる。次節以降では、それらの違いをふまえ、能開大でのソーシャル・スキルの獲得を検討したい。

3.2. 能開大への入学動機とソーシャル・スキルとの関連

能開大への入学動機とソーシャル・スキルとの関連を検討するため、クロス集計と χ^2 検定（表2参照）を行った。表3に示したように、ソーシャル・スキル18項目のうち、7項目以上で統計的に有意な関連がみられた入学動機（注4）は、「興味のある分野の勉強ができるから」、

「経済的な負担が少なかったから」、「第一希望だったから」、「両親のすすめがあったから」、「将来の仕事に役立つような力を身につけたいから」の5つであった。これら5つの入学動機に対して肯定的に回答した者が、否定的に回答した者よりもソーシャル・スキルを高く有していた。

表2 入学動機とソーシャル・スキル（「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」との関連

	興味ある分野の勉強ができる			p
	肯定	否定	% (度数)	
トラブル処理可	66.7	33.3	100.0 (33)	*
トラブル処理不可	42.0	58.0	100.0 (50)	

N=83, *p < .05

「興味のある分野の勉強ができるから」、「第一希望だったから」および「将来の仕事に役立つような力を身につけたいから」は、能開大で学卒者訓練を受講することへの積極性や意欲、入学以前の向学心を示していると考

えられる。それらを高く持って能開大で学卒者訓練を受講することで、専門的知識・技能がより身につくことは想像に難くないが、他の仲間や指導員等の他者と所属環境のなかでうまくやっていくことも可能になるのではないかと考えられる。

「経済的な負担が少なかったから」、「両親のすすめがあったから」は、一見能力の有無や獲得には関係のない変数であるように思われる。しかし、進学にあたっての経済的な負担を考慮することは、確たる意思を持たず「なんとなく」進路を決めることとは異なり、進路について検討をしたことを示唆しているのではないかと。また、両親からのすすめがあったということは、高校卒業後の進路について親子で話し合っていることを示唆しているのではないかと。両変数がそうした意味を持つと考えれば、「なんとなく」ではない意思を持ち、家族とも相談をして能開大という進路を選択したことは、学卒者訓練を受講することに対する積極性、向学心や意欲があることを暗示しているとも考えられる。それゆえ、両変数とソーシャル・スキルとの関連を見出せたのではなからうか。

表3 入学動機とソーシャル・スキルとの関連（一覧）

	ソーシャル・スキル																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
興味のある分野の勉強ができるから			*	*		*	*	**	*			***		**	*	*	*	+
経済的な負担が少なかったから					*	+			+					+	**	**	+	
第一希望だったから	**	*		***		*	+		*	*	+			**		**	+	**
両親のすすめがあったから		**		*	*	*			*	**	*	*		*				*
将来の仕事に役立つような力を身につけたいから	*	*	*	***		*		*	+		+	**			*			*

N=83, *** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .1

なお、アンケートでは上記以外に、学卒者訓練への積極性、向学心や意欲を尋ねる項目として、「とりたて資格や免許が取得できるから」、「就職状況がいいから」、「学校（高校）の先生のすすめがあったから」を設定した。しかし、それらとソーシャル・スキルとの関連は見出せなかった。資格や免許を取得することの重要性は声高に叫ばれており、その取得や受講後の就職について受講者が意識していなかったとは考えにくい。しかし、本節で扱った各変数が、高校卒業時の意識であることに鑑みれば、資格や免許、よりよい就職先選びの重要性を認識することはできても、具体的に意識することは難しかったのではないだろうか。また、高校卒業後の進路を選択するにあたって、多くの者は進路指導を受けたであろうし、それらが進路決定に一定の効果を有していることも想像に難くない。しかし、進路を最終的に選択する際、自身

の意思あるいは家族との相談がより強い影響力を持っていたのではないだろうか。

本節における分析を通じ、能開大への入学動機について、積極性、向学心や意欲の高い者は、そうでない者よりソーシャル・スキルを高く有していることがわかった。

3.3. 学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度とソーシャル・スキルとの関連

学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度とソーシャル・スキルとの関連を検討するため、クロス集計と χ^2 検定（表4）を行った。表5に示したように、ソーシャル・スキル18項目のうち、7項目以上で統計的に有意な関連がみられた考え方や態度は、「授業でわからなかったことは自分で調べる」、「授業では黒板や配布資料に書かれていないこともメモやノートに書く」、「わからな

いことは先生に質問する」, 「授業で関心を持ったことは自分で調べる」, 「いい成績をとるようにしている」, 「将来仕事をするときに役立つ知識・技能を身につけたい」の6つであった。これら6つの考え方や態度に対して肯定的に回答した者が、否定的に回答した者よりもソーシャル・スキルを高く有していた。

表4 学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度とソーシャル・スキル（「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」との関連

	職業訓練で得た力を役立てたい			p
	肯定	否定	% (度数)	
トラブル処理可	82.9	17.1	100.0 (35)	*
トラブル処理不可	60.4	39.6	100.0 (48)	

N=83, *p < .05

「授業でわからなかったことは自分で調べる」および「授業で関心を持ったことは自分で調べる」は、自身が受講する学卒者訓練において、正課内外にかかわらず自律的に学習を進められることを示しているといえるだろう。自律的に自身を管理しながら学習に臨める者は、他者のいる環境においてうまくやっていると考えてもよいようだ。

さらに、「授業では黑板や配布資料に書かれていないこともメモやノートに書く」, 「わからないことは先生に質問する」は、学習に対する自律性ばかりでなく、学卒者訓練に臨むうえでの積極性も示しているだろう。前節でも述べたように、積極的な態度で学卒者訓練を受講する者は、専門的な知識・技能ばかりでなく、ソーシャル・スキルも高く有しているようだ。

表5 学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度とソーシャル・スキルとの関連（一覧）

	ソーシャル・スキル																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
学卒者訓練の受講に対する考え方や態度																		
授業でわからなかったことは自分で調べる		+	+			+	**		*	*	*	**		+				**
授業では黑板や配布資料に書かれていないこともメモやノートに書く		**	**	*	*	**	**	*	**	**	+	+	**	+				***
わからないことは先生に質問する	*	+				+	+		*	**		+	*					**
授業で関心を持ったことは自分で調べる		**	**	+	*	**	+	**	**	**	*	**	*	***		*		**
いい成績をとるようにしている			**	**		*	*	***	**	*	+	**						
将来仕事をするときに役立つ知識・技能を身につけたい		*	*	*		*	+	*		*		+				+	*	

N=83, *** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .1

3.4. 典型的な1週間の過ごし方とソーシャル・スキルとの関連

典型的な1週間の過ごし方と、各行動に充てる時間の長さの平均値を、ソーシャル・スキルの高い者とそうでない者との間でt検定によって比較した(表6)。表7に示したように、「授業で出される宿題や課題にとりくむ」, 「学校の授業以外の自主的な勉強をする」という2つの行動に長い時間を充てる者は、ソーシャル・スキル18項目のうち7項目以上が高かった。

「授業で出される宿題や課題にとりくむ」は、正課にかかわる自習であり、「学校の授業以外の自主的な勉強をする」は、正課外で行われる自習であるが、いずれも自身で時間を見つけて自律的にとりくまなければ達成されないものである。前節までに述べたように、これらの行動に充てる時間の長さは、学卒者訓練に対する積極性、

向学心や意欲、あるいは、正課内外での学習に臨む際の自律性を反映したものであると考えられる。積極的かつ自律的に学習に臨み、正課内外での学習時間を長く行う者は、専門的な知識・技能ばかりでなく、ソーシャル・スキルのような汎用的な能力も高いようである。自律的な学習に充てる時間の長さは、前節までに述べた学卒者訓練に対する積極性、向学心や意欲があるからこそ担保されるとも考えられるため、それら相互の関連性についても分析を深める必要がある。

本稿で設定した18項目中7項目以上という基準に達していなかったが、「友人との付き合い」, 「アルバイト」に長い時間を充てる者は、そうでない者より5項目のソーシャル・スキルが高かった。友人との付き合いは、無意識的に行っているものかもしれないが、他者とのかかわりであることはいうまでもなく、それを積極的にこなす

者は、意図せずしてソーシャル・スキルを高めているの
だろう。アルバイトについては、長時間やり過ぎること
で学卒者訓練の支障となるおそれもあるが、適量行うこ
とで、日常生活を円滑に営むための一助となると考えら
れる。

なお、アンケートでは、正課内での行動についても尋
ねたが、ソーシャル・スキルの高い者とそうでない者との
間で、それらの行動に充てる時間に平均値の差は見出
されなかった。しかし、この知見は、学卒者訓練の内容が
ソーシャル・スキルの獲得と関連がないということを示
しているわけではない。たとえば、「学校の授業に出席す
る」という項目から学卒者訓練への出席時間をみると、
7 割以上の者が週に 21 時間以上、8 割弱の者が 16 時間以
上受講していると回答している。学卒者訓練の場合、大
半の者は長時間出席していた。学卒者訓練への出席時間

に差がつかないため、このような知見が導き出されたと
考えられる。

表 6 正課外活動時間平均値の差とソーシャル・スキル
（「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを
上手に処理できますか」）との関連

	トラブル 処理可		トラブル 処理不可		t 値
	M	SD	M	SD	
	学校の授業以外の 自主的な勉強	3.78	5.91	1.54	

平均値 (M) の単位は時間, N=83, * $p < .05$

表 7 正課外活動時間平均値の差とソーシャル・スキル (一覧)

		ソーシャル・スキル																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
↑ 週間の 過ごし方	授業で出される宿題や課題にとり くむ	*		+	+		*	*	*			**					*		
	学校の授業以外の自主的な勉強を する		*	*				*	+			*	+				***		
	友人との付き合い		*		+		+					*		**					
	アルバイト					*	+				**			*	+				

N=83, *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$

4. おわりに—本稿の知見と今後の課題

前節までの分析結果から、本稿は、以下の 3 つの知見
を得た。すなわち、(1) 学卒者訓練に対する積極性、向
学心や意欲を持つ者、(2) 正課外学習に多くとりくむ者、
(3) 他者と豊かな関係を保てる者は、これらの条件に該
当しない者よりもソーシャル・スキルを高く有している、
である。一般的に考えて、積極性や社交性は、ないより
もあるほうが好ましいと考えられるため、これらを高く
有する者の能力が高いという知見は、ある意味では予測
しやすく、当然と言えるかもしれない。しかし、職業訓
練の効果に着目し、それが各分野の専門的な知識・技能
の獲得ばかりでなく、たとえばソーシャル・スキルのような、
日常生活を円滑に営むうえで求められる汎用的技能の
育成にも貢献し得ることを指摘した点は、本稿の新規性
であると考えられる。

ただし、本稿における分析や知見には、課題も多く残
されている。第一に、サンプル数である。本稿では、A
県内の能開大で電気分野を学習する受講者 83 名へのア
ンケート調査で得られたデータを分析した。しかし、本
稿で扱った 83 人の回答が、能開大における学卒者訓練受

講者の姿を代表しているわけではないため、導き出され
た知見が、一般性を有するものであるとは言い難い。受
講する職業訓練の分野や領域、訓練の内容や実施方法、
あるいは各能開大の所在地域等の違いによって、ソーシ
ャル・スキルの獲得状況は異なるかもしれない。そうし
た条件の違いを織り込んだ分析を行うためにも、より大
きなサンプル数のデータを収集することで、能開大で学
卒者訓練を受講する者の傾向を明らかにする必要がある。

第二に、変数の選択・操作方法である。本稿では、学
卒者訓練に充てる時間数をみたものの、大半の受講者は
訓練受講に長い時間を充てており、受講時間数の差を見
出せなかった。そこで、受講に対する考え方や態度を用
いた分析を行い、その結果積極性や自律性を有する者の
ソーシャル・スキルが高いことがわかった。しかし、成
績をはじめ、目を向けるべき変数は数多く存在すると考
えられ、どのような受講者の能力がより高いかを明らか
にする必要がある。また、本稿では、5 件法で尋ねた項
目をリコードして分析を行ったが、今後より研究を發展
させるため、回答者の意識の差をより考慮できるような
変数の操作を検討しなければならない。

第三に、分析方法である。本稿では、クロス集計と χ^2 検定およびt検定を用いてソーシャル・スキルに関する認知度の違いを検討し、上述の分析結果を得た。しかし、一連の分析は、能開大への入学動機、学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度、正課内外の行動に充てる時間数が、ソーシャル・スキルの高さに関連があることを指摘するにとどまり、前者を独立変数、後者を従属変数とする因果を明らかにしているわけではない。本稿では、積極性、向学心や意欲、自律性が高い者や、正課内外での学習等に長い時間を充てる者は、専門的な知識・技能ばかりでなく、ソーシャル・スキルも高めてい

ると仮定した。しかし、もともとそれらの高い者が、質の高い学習を意欲的にたくさん行っていると解釈することも可能であるため、因果の向きについても検討をおこなわなければならない。そのためにも、サンプル数を増やしたうえで、関連・相関ではなく因果を明らかにするための分析を行う必要がある。同時に、職業訓練を通じた能力や技能の獲得を従属変数として、どの独立変数がそれに強い影響力を持つかについても分析する必要がある。これらの課題を克服するため、研究を進捗させ、別稿を用意したい。

表8 キャリア・アダプタビリティ (17項目)

1. 学校生活に、「やりがい」を感じている。
2. これからの人生設計には、大変関心をもっている。
3. 学校生活は自分に合っている。
4. 人生をより充実したものにしたいと強く思う。
5. 学校生活は大切だと感じる。
6. どうすれば人生をよりよく送れるかをしばしば考える。
7. 学校生活の中には、様々なことに挑戦する機会がある。
8. 充実したキャリアを実現できるかどうかは、自分の行動次第だ。
9. 自分が望む人生を送るために、具体的な計画を立てている。
10. 環境変化にストレスを感じるよりも、それを楽しんでしまうほうだ。
11. これからのキャリア形成について自分なりの見通しをもっている。
12. 新しい状況におかれても、気持ちの切り替えは早いほうだ。
13. 先々やってみたいことを具体的にイメージできる。
14. 人生は何が起こるかわからないから面白い。
15. 自分のキャリア形成に役立つ情報は積極的に収集している。
16. 学校生活とプライベートな生活のバランスは良いほうだ。
17. 人生の送り方には、自分で責任を持ちたい。

表9 リーダーシップ (4項目)

1. グループに目標を周知できる。
2. 作業分担を割り振れる。
3. メンバーの作業状況を把握できる。
4. グループのモチベーションを維持できる。

表 10 サーヴェント・リーダーシップ (10 項目)

1. まずはメンバーの話をしっかり聞き、メンバーが望んでいることを聞き出していますか.
2. メンバーの気持ちを理解し、共感することができますか.
3. メンバーの心の傷を癒し、本来の力を取り戻させていますか.
4. リーダー自身に対してもメンバーに対しても気づきを得ることができ、メンバーに気づきを与えていますか.
5. リーダーの権限により、強要することなく、メンバーを説得できていますか.
6. ビジョンを持ち、それを相手に伝えることができますか.
7. 現在の出来事を過去の出来事と照らし合わせ、そこから将来の出来事を予想できていますか.
8. リーダー自身が利益を得ることよりも、メンバーに利益を与えることに喜びを感じますか.
9. メンバーが秘めている力や価値に気づいており、メンバーの成長を促すことに大きく関係していますか.
10. 課題をする人たちの間にコミュニティを創り出していますか.

表 11 能開大への入学動機 (12 項目)

1. 興味のある分野の勉強ができるから
2. とりたい資格や免許が取得できるから
3. 就職状況がいいから
4. キャンパスの雰囲気がいいから
5. 経済的な負担が少なかったから
6. 第一希望だったから
7. 自宅から通えるから
8. 両親のすすめがあったから
9. 将来の仕事に役立つような力を身につけたいから
10. 入試方式が自分に合っていたから
11. 卒業までの自由な時間を満喫したいから
12. 学校(高校)の先生のすすめがあったから

表 12 学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度

1. 学校の授業の予復習をする
2. 授業に必要な教科書、資料などの道具は毎回持参する
3. 授業に遅刻しないようにする
4. 授業でわからなかったことは自分で調べる
5. 授業では黒板や配布資料に書かれていないこともメモやノートに書く
6. 授業中私語はせず、集中している
7. わからないことは先生に質問する
8. 授業で出された宿題や課題はきちんとやる
9. グループワークや討論に積極的に参加する
10. 幅広い視野や知識・教養を身につけたい

表 13 典型的な1週間の過ごし方 (11項目)

1. 学校の授業に出席する
2. 授業の予復習, 実験や実習の準備をする
3. 授業で出される宿題や課題にとりくむ
4. 学校の授業以外の自主的な勉強をする
5. 友人との付き合い
6. サークルや部活動, クラブ活動
7. アルバイト
8. 社会活動 (ボランティア, NGO 活動などを含む)
9. 読書 (マンガ, 雑誌を除く)
10. テレビや DVD などを見たり, マンガや雑誌を読んだりする
11. インターネットや SNS (ツイッターや Facebook など) を使う

参考文献

- [1] 小方直幸:「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」, *高等教育研究*, 第 11 集, pp. 45-64 (2008).
- [2] 両角亜希子:「大学生の学習行動の大学間比較—授業の効果に着目して—」*東京大学大学院教育学研究科紀要*, 第 49 巻, pp. 191-206 (2009).
- [3] 溝上慎一:「「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—」, *京都大学高等教育研究*, 第 15 号, pp.107-18 (2009).
- [4] 谷村英洋:「大学生の学習時間と学習成果」*大学経営政策研究*, 第 1 号, pp. 69-84 (2011).
- [5] 山田剛史・森朋子:「学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」*日本教育工学会論文誌*, 39 巻, 1 号, pp. 13-21 (2010).
- [6] 金子元久:「大学教育と学生の成長」*名古屋高等教育研究*, 第 12 号, pp.211-36 (2012).
- [7] 中原淳他編:「活躍する組織人の探求: 大学から企業へのトランジション」東京大学出版会, 東京 (2014).
- [8] 菊池章夫:「社会的スキルを測る: Kiss-18 ハンドブック」, 川島書店, 東京 (2007).
- [9] 中央教育審議会:「学士課程教育の構築に向けて (答申)」, p.18 (2007).

(原稿受付 2017/01/12, 受理 2017/03/31)

*松本 暢平
職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: y-matsumoto@uitech.ac.jp
Yohei MATSUMOTO, Faculty of Human Resources Development, Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi, Kodaira, Tokyo 187-0035.

*新目 真紀, 博士 (工学)
職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: arame@uitech.ac.jp
Maki ARAME, Faculty of Human Resources Development,

Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi, Kodaira, Tokyo 187-0035.

*松本 和重
職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1 email: k-matsu@uitech.ac.jp
Kazushige MATSUMOTO, Faculty of Human Resources Development, Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi, 187-0035.

*小柳 雅幸
中国職業能力開発大学校, 〒710-0251 岡山県倉敷市玉島長尾 1242-1 email: koyanagi@ap.chugoku-pc.ac.jp
Masayuki KOYANAGI, Chugoku Polytechnic College, 1242-1 Tamashima-nagao, Kurashiki, Okayama, 710-0035.

*平田 彰
沖縄職業能力開発大学校, 〒904-2141 沖縄県沖縄市池原 2994-2 email: hirata@okinawa-pc.ac.jp
Akira HIRATA, Okinawa Polytechnic College, 2994-2 Ikehara, Okinawa, Okinawa, 904-2141.

注

[注 1] ソーシャル・スキルは, 「1. いつもそうでない」～「5. いつもそうだ」の 5 件法, キャリア・アダプタビリティとリーダーシップは, 「1. 全くそう思わない」～「5. とてもそう思う」の 5 件法, サーヴァント・リーダーシップは, 「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の 5 件法で尋ねた. 分析では, 「3. どちらともいえない」に回答が集中しやすい傾向がみられたため, 選択肢 1～3 を否定的な回答としてソーシャル・スキルが低い群とみなし, 選択肢 4～5 を肯定的な回答としてソーシャル・スキルが高い群とみなした.

[注 2] 能開大への入学動機と学卒者訓練を受講することに対する考え方や態度は, 「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の 5 件法で尋ねた. 分析では, 両変数ともに, 選択肢 1～3 を否定的な回答として, 選択肢 4～5 を肯定的な回答として扱った. 典型的な 1 週間の過ごし方は, 「1. 0 時間」, 「2. 1 時間未満」, 「3. 1～2 時間」, 「4. 3～5 時間」, 「5. 6～10 時間」, 「6. 11～15 時間」, 「7. 16～20 時間」, 「8. 21 時間以上」の 8 件法で尋

ねた。分析では、各選択肢の平均値（たとえば「11～15 時間」ならば「13.0 時間」とする）を算出し、比例尺度として扱った。

[注 3] 菊池章男により開発された KISS-18 は、対人関係を円滑に営むスキルを測定するための尺度^[9]であり、本稿の分析は、それを援用した。2008 年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、日本の大学が授与する学士の学位が保証する能力として汎用的技能があげられている。そこで汎用的技能は、「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」^[10]

とされている。このことに鑑み、本稿では、ソーシャル・スキルを汎用的技能のひとつとして分析を行った。

[注 4] ソーシャル・スキル 18 項目の 3 分の 1 より多いことを根拠として、暫定的にこの基準を設定した。今後の研究を通じ、より大きなサンプルのデータを収集し、スキル獲得において各変数がどの程度の影響力を有するかについて検討しなければならないことはいままでもない。